丸西へ

—オンボロ漁船ほろ酔い航海記—

宮原昭夫

角川書店

さはら丸西へ
——オンボロ漁船ほろ酔い航海記——
宮　原　昭　夫
1978年11月30日　初版発行

発行者　角川春樹　発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見２—13—３
電話 東京(03)265-7111(大代表)
郵便番号 102　振替東京 3-195208
印刷所　東洋印刷株式会社　製本所　鈴木製本株式会社
© Akio Miyahara, 1978　Printed in Japan
0093-872234-0946(0)

目

次

1 前途多難の予徴あり――――七
2 わざわざ虎口へとびこんだ――――三四
3 こころもとない大修理――――三九
4 おそるおそるの駿河湾――――七三
5 故障、大波、また故障――――九九
6 遠州灘あくび旅――――一一五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7 ついに紀州(きしゅう)のトバクチへ――――一三八
8 大漁と食当り――――一五六
9 洋上天国――――一六八
10 本州最南端――――二〇〇
11 越すに越されぬ潮岬(しおのみさき)――――二一八
12 名残りはつきぬ由良(ゆら)の海――――二三一

装丁　田沢　茂

さはら丸西へ

――オンボロ漁船ほろ酔い航海記――

1　前途多難の予徴あり

私は弱った。いや私だけでなく、この船にたいして多少とも予備知識のある同行者たちは、みんな弱ったにちがいない。相模川河口近くの岸辺に沿った小公園の中の四阿の中に、あいにく降りしきっている雨を避けて、すでに私たちよりも先に来て待ちかねていた彼女は、レモンイエローの軽快なスーツに編上げの長い革のブーツという、あでやかなよそおいで、あまつさえ、真新しい純白でファッショナブルなキャプテン帽を目深にかぶっていたのだ。

「おそいじゃないの、みなさん」彼女は生き生きと叫ぶ。

「すばらしい海の旅への船出の日だってのに。私なんか、早く目がさめすぎて、こまっちゃったくらいよ。……でも、ほんとにすてきねえ……」彼女はうっとりと両手を組み合わせ、

「みなさん、船で、この平塚から、大阪まで、いらっしゃるんでしょう。うらやましいわあ。……でも、私だって、今日一日だけとはいえ、この記念すべきスタートの日に、下田まで一緒に乗せてってもらえるんだから、光栄だわ。なんだか私、〝太陽がいっぱい〟の中のマリー・ラフォレになったみたいな心境よ。じっさい、あの映画もすばらしかったけど、なんといってもあの船がね！……ところで……」彼女は、のび上がって、きょろきょろ河岸に舫ってある船たちのほうを見渡しながら、

「かんじんの船は、まだ来てないんですか？　どうもそれらしいのが見当らないわねえ」
ところが、その船は、じつは彼女の真前、いちばん近いところに、もうちゃんと存在しているのだ。
「……どうします？……」われらの船の、船主総代格の「ポセイドン」氏は、いささか弱気な口調になって、
「今日のところは見合せときますか？　こんなに雨がドシャ降りなことだし」
「あら、船ってもんは、雨だと出航出来ないんですか？」レモンイエローに盛装した「ラフォレ」嬢が不思議そうに振りかえる。
「いや、あながち出航できないってわけでもないんですが……」ポセイドン氏は、しぶしぶ首を振り、
「それじゃ、やっぱり出ますか」
彼は長身でたくましく、笑うときに口元からこぼれる歯以外には、全身白いところがまったくない。さながらギリシャ神話の海神のごとき偉丈夫なのだが、そのくせ、彼の口調はいつも、はなはだ優しく柔和で、声だけ聞いていると、思春期の恥じらいがちな少年のようで、そのルックスとまことに懸隔がある。彼のおそるべき日灼けからは想像を絶するだろうが、彼の本業は画家である。もっともその手は絵筆よりも釣り竿を持つことのほうが多いようだ。
たしかに、われらの船も、曲りなりにも船である以上、ともかく水の上に浮いているのだから、雨が水である限り、雨で沈む気遣いはあるわけがない。それはそうなのだが、なにぶんにも、われらの愛船は、実は五トンあまりの木造漁船なのである。ごぞんじのように、漁船というものには、甲板は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるけれど、屋根などというものはありはしない。だからこそ、私たちは一様に、いちばん古いジーパンに、いちばん色あせてくしゃくしゃなジャンパーなどを選んで着込んで来ているのだ。それなのに、このラフォレ嬢のいでたちときたら……どうやら彼女は、航行中の船内のキャビンで、カクテル・パーティでもおっぱじめるような意気込みじゃないか。私たちが彼女を横眼で眺めては溜息ばかりついているのは、しかし、そのせいだけではなかった。一口に漁船といっても、ピンからキリまであるが、その中でも、われらの愛船は、それこそなみたいていの代物ではないのである。その船体は、大昔には純白だったような痕跡があるが、目下のところはすっかりくすんで灰色に近くなったペンキに覆われている。なかんずく異彩を放っているのは、そのへさきから水面までの竜骨の上に釘で打ちつけられている、切りひろげられた、いくつもの自動車の古タイヤだ。本来ドーナツ型の原形を持つ古タイヤを、いくら切りひろげたとはいえ、ほぼ直線の竜骨の上に張りつけたのだから、そこは一定の大きさに連続的にイボイボにふくらんでいて、さながら古代の恐竜の背中みたいだ。これは緩衝物として船首を保護する役割を果しているのだろうが、その甲斐もなく、すでにそのへさきのいちばんとがった先端は、以前の持主が、曾てしたたかにどこかに激突させたことがあるらしく、根元に大きな割れ目ができていて、非力な私が片手で押してみても、まるで蝶番がついているように、その先端部分が左右にかなり動くのである。

この船は、船腹外側の中程に、前から後ろまで船板の合わせ目の上に細長い木材が一本張り渡されていて、船の左側は、それが建造当時のまま健在なのだが、右側はそれが全部失われていて、その代り、どこからかその都度拾ってきたらしい、ありあわせのさまざまな形の材木が、とっかえひっかえ

打ちつけられている。したがって、この船のルックスは、はなはだしく左右不均衡であって、右から見たときと左から見た時とでは全然別の船みたいに見えるのだ。というより、むしろ、左側から見たときには、それでも曲りなりにも船らしく見えるのだが、右側から見たときには、むしろ船の残骸みたいに見える。この船の甲板は、購入当初には、うっかりその上を歩き回ると、腐った板を踏み抜いて、ずぶりと脚が腿のあたりまで入ってしまったりしたものだが、その後ポセイドン氏が暇をみてはコツコツ張り代えてくれたので、その点に関してはいまは心配がない。

つまり、一口に言ってこの船は、いまのところその実質的な部分は健在なのだが……つまり浸水沈没のおそれやエンジントラブルの心配はなく、舵やスクリューやスパンカーなどはけっこうしっかりしているのだが、なにぶんにも、その非実質的な部分には、かなり問題がある、と言わざるをえない。少くとも、仮にも〝太陽がいっぱい〟などと同列にあつかってもらっては、こっちの立つ瀬がないというものだ。

もっとも、さぞかしラフォレ嬢を失望落胆させるに違いない、この船のこのようなルックス上の弱点も、しかしこの船の購入の際には、いささかも私たちの眼中にはなかった。というのは、そもそも私たちがこの船を、平塚の漁師から二つ返事で買い込んでしまった最大の理由は、この四十五馬力、定員二十八名、船長十メートルあまりという船の値段が、二十万円、という破格の安さに、私たちが目がくらんだところにあったからだ。ところが、私たちが大急ぎでお金をとりあえず十万円だけ掻き集めて、船の持主のところへ持って行き、残りはもう少し待ってほしい、と頼むと、持主は、いともあっさりと、

「もう、めんどくせえから、これだけでいいや」と話のケリをつけてしまったのである。
いままで、値段の折合いがついたあとで、いざお金を渡す段になって急に値上げを言い渡された経験はあるが、このように、支払いの段階になって売手から突然半値にされたのは、さすがに私も生れて初めてだ。その点、この船は、かなりぶきみなところのある船で、ひょっとしたら幽霊でも出るんじゃねえか、とあやぶむ仲間も居たくらいだ。
つまり、この船は、その値段の点から言っても、そもそもどのような幻想も抱きようがない代物なのであって、私たちも、仮にもこのたびのようなとんでもない誤解にさらされる破目になろうとは、思いもよらなかった。思うに、船というものは、女性にとっては、常になにかしら幻想的なものなのだろう。
ともあれ、ついにポセイドン氏は、さすがに浮かぬ顔ながら、あらためて、本日の雨天をついての出航の断を下した。
そうと決ると、私はすぐさまあれこれ荷物をかかえて、さっさと船のほうへと一足先に逃げ出した。かのラフォレ嬢が事の真相に直面した瞬間の、ドラマのクライマックスを、とうてい見るに忍びなかったからである。
河岸に接した、木造の浮き桟橋の一つの上に、モーターボートが引き上げられていて、その桟橋の横腹へ、私たちの船は横付けにされている。モーターボートは他人のもので、私たちはその桟橋に同居させてもらっているのだ。私がそこから船に乗り移って、あれこれ仕事をしていると、やがて、どやどやと、あとの連中も乗り込んで来た。その中に、誰に引導を渡されたのかは知らないが、紺色の

だぶだぶの雨合羽と防水ズボンを着用させられ、ブーツの代りに男物のゴム長靴を履かされたラフォレ嬢が、それでも一生けんめいにほほえもうと、いたいたしい努力をしている姿が見受けられた。

「でも、まあ、この船だって、これでペンキの一つも塗りかえてごらんよ。けっこう見栄えがしてくると思うんだ」

ポセイドン氏は、きこえよがしに、負けおしみのひとりごとを呟きながら、さっそくエンジン・ルームに這い込んで行った。

「彼女には、僕からも、あらかじめこの船については説明しておかなかったわけじゃないんですがね……」と私と並んで一緒にエンジン・ルームを覗き込みながら、ラフォレ嬢の婚約者である青年が言い訳がましい口調で、

「とにかく彼女ときたら、よろず先入観念の強すぎるタチだからなあ」と、かわいそうなほどしょんぼりとして雨の降りしきる甲板に立ちつくしている彼女のほうを、とほうにくれたようにちらっと振りかえる。彼女がラフォレなら、さしずめ彼はドロンだが、実際にはアラン・ドロンと彼とでは、ちょうど〝太陽がいっぱい〟のあの船とこの船くらいの差がある。

やがて、エンジン・ルームの中で、あれこれ操作をしていたポセイドン氏が、

「掛けるよう」わめくと同時に、ブシュー、という音と、ダダダダッという音とが湧き起る。

「よし、掛かったっ」私は思わずほっとする。この船には電気系統の装置が全くなく、エンジンの始動も圧縮空気で行うのだ。

「おっす、おそくなりまして」その時、「ペーパー・シジフォス」青年が、のっそりと船に乗り込

んでくる。

「乗り遅れたんじゃないかと思って心配しながら来たんだけど、まにあってよかった」その彼は、今日も、黒い大きなボストン・バッグをぶら下げているが、はちきれんばかりのそのバッグの口からは、新聞紙の束がはみ出している。彼は中学生の或る日、毎日必ず新聞をすみからすみまで読む決心をして以来、もう十数年間、その習慣が神経症的に固着してしまっていて、つい読みきれなかった分を、次々にボストン・バッグにつめて、どこに行くにも必ず持って歩いていないと気が安まらないのである。しかし、いくら読んでも、新聞は毎日増えて行くので、彼の持ち歩く量はいっこうに減らない。かくて、彼は、かのギリシャ神話のシジフォスが永劫運び上げ続けている岩の代りに、新聞紙の束を永久にかつぎ回っていなければならないのである。

「……ところで……」彼は、乗り込んだ船をあらためて見回しながら、

「ひょっとして、これ、この前乗せてもらった船と違うんじゃないかな……なんだか乗るたんびに船が変ってるみたいだけど……。まえの船たちはどうしたんです?」

「……まあね」私はためらいがちに生返事をする。くわしく説明したりすると、これからの彼の船上での居心地にさしさわりが出てくるのではあるまいか、と気遣ったのだ。

なにぶんにも、われらの仲間の船歴ときたら、いささか他言をはばかられるかたむきがある。まず、わたしたちの初体験であるロシナンテ一号というちっぽけな漁船は、無慮十数回の沈没をくりかえしたあげく、最後には、十数人がかりでまた沈んだ船を引き上げようとしたら、どういうものか逆に完全に沈んで行方不明になってしまった。その後、大雨が降って、その水が引いたあと、河岸に、ふた

たび穴だらけの船体が現れてひっかかっていたので、みんなで打ちこわして、その船板を燃料にしてバーベキューをして、飲んだり食ったりしてしまった。次のロシナンテ二号は十九フィートのヨットだったが、これは颱風が来たときに沖合へ流れ出て行ってしまい、知り合いの漁師にやっと拾って来てもらってみたら、船底に大穴があいていて、しかも、それは颱風のせいというよりは、船全体がブヨブヨに腐っていたせいだ、と判明したので、骨組だけ残して、船板のベニヤ板をぜんぶはがして、それでバーベキューをして飲んだり食ったりしてしまった。その次のロシナンテ三号という二十馬力の漁船は、やはり別の颱風の大雨で河上のダムの放水をしたときに、河から海へ押し流されて、少し離れた海岸に、ずたずたに裂けて漂着したので、これもみんなで打ちこわして、バーベキュー・パーティに使ってしまった。最後に、シベール号という、これも木造の漁船も、平塚の漁港に舫っておいたら、いつのまにか、原因不明で沈んでしまっていて、これはそのまま港から船で引っ張り出して、近くの河原で打ちこわして、バーベキューの燃料にして、飲んだり食ったりしてしまった。

こうしてみると、私たちは、船を買っては、結局かたっぱしからバーベキューにして食ってしまってばかりいることになる。

「ふうむ……」私がしぶしぶ事の次第を説明すると、ペーパー・シジフォス氏は、むずかしい表情で、あらためてあたりを見回し、

「ところで、次のバーベキューは、いつごろになりそうですか?……見たところ、さほど遠い将来でもなさそうだけど」

「よけいなお世話だ」と私は憮然とする。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com